

# 小学校における家庭科 CLIL のあり方について —高学年の調理実習を事例として—

二五義博（山口学芸大学）・古賀悠里江（佐賀市立鍋島小学校）

## **An Ideal Method of Home Economics CLIL in an Elementary School: A Case of “Cooking Practice” in English in the Higher Grades**

Yoshihiro NIGO (Yamaguchi Gakugei University)

Yurie KOGA (Nabeshima Elementary School, Saga City)

### 1. はじめに

2020年度より、日本の小学校高学年において教科としての英語学習が本格的に導入され、児童が小学校で英語に触れる機会は格段に増えた。しかしながら、よりオーセンティックな多様な場面での英語使用を児童にさせたいならば、英語の授業内だけでそれを考えるには、もはや限界があるであろう。そこで、算数、理科や社会の内容を学びながら同時に英語学習を行う CLIL（内容言語統合型学習）は、英語使用の量を増やし、その質を高める1つの有効な学習法として注目されている。また、CLILでは、「内容」と「言語」の同時習得に加え、「思考」の発達や「協学」による学習者主導型の学びが目指され、アクティブラーニングにも通じるものがある（小嶋, 2016）。

2010年度半ばより、文部科学省は、小学校における英語教育と他教科との連携の必要性を強調するようになった。例えば、文部科学省（2014）の「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」においては、小学校高学年における外国語教育の改善の方向として、「他教科等と連動した学習内容や言語活動を設定することにより、思考力・判断力・表現力や主体的に学習する態度を身に付けることも重視する」ことが述べられている。また、2020年度より実施されている現行の小学校学習指導要領（文部科学省, 2017a, p.177）において、第3の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること」が明記されている。

この文部科学省の方針とも合致する形で、2021年度に発行されている全7社の小学校高学年向けの英語教科書の中には、CLILの要素がある程度含まれるようになった。しかしながら、本稿が対象としている小学校6年生の英語教科書を例にとると、その大半は社会科や理科に関係する内容で、実技教科、とりわけ家庭科に関する内容はほとんど含まれていない。全7社のうち、A社が6課の“Let’s think about our food”で、B社が2課の“What vegetable do you like?”で家庭科内容を取り入れている程度である。具体的には、前者は食べたものや食材、栄養素のグループ化、オリジナルカレーの考案など、後者は野菜の種類と工夫したスープ作りをテーマとして取り扱っている。

本研究では、文部科学省が他教科との連携を強調しているものの、実際に小学校高学年児童が学ぶ英語教科書において扱いの少ない家庭科内容に着目した。その際に、本稿では、よりオーセンティックな場面で英語を使用するためにも、英語の授業ではなく家庭科の授業における CLIL の実践結果を報告する。つまり、本研究の目的は家庭科の教科内容をコアとしながら、CLIL の 4C (Content, Communication, Cognition, Community) の視点からの分析により、調理実習 (野菜いため作り) の内容を英語で学ぶことが、内容への動機づけ、コミュニケーション能力育成、思考や協同学習 (家庭科 CLIL の場合、友達との意思決定や認め合いも含む) の視点でいかなる効果があるかを探ることである。

## 2. 理論的背景

### 1) 日本における CLIL の先行研究

日本における CLIL 研究は、ヨーロッパにおいてはすでに浸透していた CLIL を初めて本格的に日本に紹介した先駆的な渡部他 (2011)、笹島 (2011)、和泉他 (2012) によって本格的に始まり、ここ 10 年で盛んに行われるようになった。本研究の対象とする小学校段階に関わる代表的な先行研究例を挙げると、図画工作・理科・社会の内容を総合的に活用している Yamano (2013)、算数の計算を取り入れた二五 (2013)、国旗、世界地図、時差など社会科内容を利用している二五 (2014)、多重知能理論を活用して教科横断的指導の効果を検証した二五 (2016) などがある。また、最近では、日本に取り入れることが可能な形の CLIL の英語学習指導案を体系的に提示した笹島・山野 (2019) や、自らの実践に基づき様々な教科の CLIL の授業案を提案した柏木・伊藤 (2020)、日本や海外の CLIL の理論や実践を体系的に整理した笹島 (2020) などがある。小学校の段階においては、算数、理科や社会の内容に比べ、実技教科を生かした視点での指導法や教材の開発はまだ十分には行われていないが、最近になっていくつか実践研究が見られる。例えば、熊本県の公立小学校 5 年生の図画工作科と外国語活動による実践事例 (藤井・東, 2017)、山梨県の公立小学校 5 年生を対象とし家庭科の内容を取り入れた外国語活動を行った事例 (太田・長瀬, 2018)、小学 5 年生に対する英語での体育の表現運動の実践 (岩城, 2020) などがある。

一部のものを除き、ここ 10 年の日本における CLIL 研究は英語を専門とするものが主導的役割を果たすことが多かったこともあり、言語面に主に焦点が置かれることが多く、内容面において児童の発達段階に合ったものなのか、また、他教科の方の達成すべき教科目標に即したのかなどの検討が十分に行われていたとは必ずしも言えない。そこで、本研究では、小学校英語教科書や日本の先行研究でまだあまり取り上げられていない実技教科 (ここでは小学校 6 年生の家庭科) を対象とするとともに、内容重視型の CLIL の事例を考察していくこととする。

### 2) CLIL の 3 つのタイプ

Coyle et al. (2010, p.1) の定義によれば、CLIL は「二重の焦点を持つ教育的アプローチ (dual-focused educational approach)」であり、その焦点は、「内容だけでなく、言語だけでなく (not only on content, and not only on language)」様々であるとされている。CLIL と言っても、内容あるいは言語への比重の置き方によって多様なタイプが存在するのであるが、大まかには次の 3 つのタイプがある。家庭科を例にとって考えた場合、第 1 は、ヨーロッパの国々において CLIL というタイトルの付く授業で目標とされることの多い、家庭科の内容と言語を各 50 % ずつにするタイプ (図 1) である。しかしながら、1990 年代から CLIL が浸透してきた EU 諸国とは異なり、日本においては第 1 のタイプの実践は困難であろう。日本で家庭科 CLIL を考える場合は、家庭科の授業を核にして周辺で英語を使用する第 2 のタイプ (図 2) か、英語の授業を中心にしながら一部家庭科の要素を組み込む第 3 のタイプ (図 3) のどちらかが現実的であろう。ちなみに、

本研究は家庭科の授業をコアとする第2のタイプにあたるが、できるだけ英語の要素も多く取り入れる試みはしている。

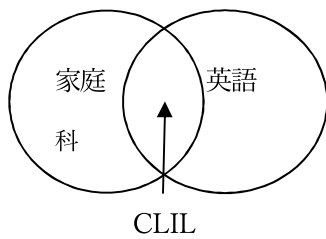


図1 均等モデル

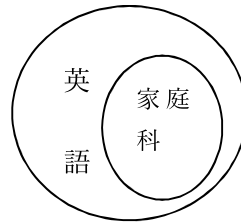


図2 家庭科コア-英語周辺モデル

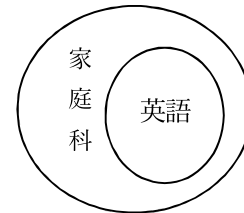


図3 英語コア-家庭科周辺モデル

### 3. 研究の概要および授業の工夫

本研究の対象者は、広島県三原市内の附属小学校6年生1クラス30名である（授業は2021年3月に2時間分で実施）。研究の手順としては、まず、家庭科と英語の専門家が協力してCLILの4つの軸に基づく教材を作成し、授業案（表1）をデザインして実践した。本時の家庭科学習としての内容面の目標は、「提示された材料や調味料の中から友達好みや状況に応じて選択・決定し、工夫して野菜いためを作る」ことで、思考や協学の活動も多く含まれる。この家庭科の目標の達成を主眼としつつも、言語面では、好きな材料や味付けを2人組の友だちに英語でインタビュー、食材を選んだ理由や調理の工夫点を英語で表現、友達が作った野菜いためを英語で評価するなど、授業のできるだけ多くの場面で英語を使用するよう試みた。その際、小学校6年生の理解を手助けするため、足場かけとしての語彙リストや読み・書きも効果的に行えるワークシート（参考資料）を準備した。

次に、授業実践の後には学習者の反応を見るため、選択式（4件法）と自由記述式を併用したアンケート調査を実施した。

### 4. 家庭科 CLIL の実践について

#### 1) 研究の対象

本研究では、小学校の高学年（6年生）を対象としている。対象とした学校では、新学習指導要領の完全実施にともない、中学年から週1時間の外国語活動を実施している。高学年からは週に2時間の英語科を実施し、児童はいろいろな単語や表現に慣れ親しみ、それらを少しずつ獲得しつつある。また、家庭科においては高学年から週2時間実施し、裁縫や調理、住まい方等について学習することで、家庭生活における基礎的・基本的な知識及び技能を習得してきている。そこで、本研究の対象は、外国語活動や英語科をある程度受け、安全面に配慮しながら家庭科の基礎的・基本的な事柄が理解・実行できる高学年児童を対象とした。

#### 2) 家庭科の単元の設定について

本研究における家庭科 CLIL では、「B 衣食住の生活」の中の「食生活」の内容を取り上げた。小学校学習指導要領解説の家庭編によると、「課題をもって、健康・安全で豊かな食生活に向けて考え、工夫する活動を通して、食事の役割、調理の基礎、栄養を考えた食事に関する知識及び技能を身に付け、食生活の課題を解決する力を養い、食生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育成すること」（文部科学省、2017b, P34）と示されている。

このことから、まず、児童に受け身ではなく主体的に思考させながら取り組ませるには、いろいろな材料や調味料、調理道具等の具体物が用意でき、「ゆでる」「いためる」等動作化しながら

コミュニケーションを取れることが家庭科 CLIL の実践として重要と考えた。小学校段階における英語の語彙を考えた際に、野菜の名前や「切る」「洗う」等の表現は生活の中でも聞き慣れていると思われるが、調味料や調理道具等の表現はほとんど聞いたことがないと考えられる。しかし、その英語表現を知らなくても具体物を示したり動作化したりすることで理解を促すことができ、調理の基礎的な知識及び技能だけでなく、その英語表現も新たに獲得させることができる。また、誰かのために調理をすることで、相手の好みや状況を考え、相手が喜ぶように工夫しようと思える場面が設定できることも、「食生活」の内容を取り上げた1つの理由である。相手の好みを尋ねることで、相手に適した材料選びや切り方、いため方などの工夫ができると考えられる。そのため、「食生活」の内容は思考の面でも効果があると判断している。

### 3) 授業（一単位時間）の構成について

今回は、野菜いための調理実習を通して、調理の知識及び技能の習得・活用をねらうだけでなく、英語でのコミュニケーションと思考面にも重点を置いて授業を構成した。

本時までに、児童はじゃがいもを使った調理を3回、基本となる野菜いための調理を1回経験している。そのため、調理実習に慣れており、段取りよく進めていくことができると考えた。しかし、コロナ禍ということで、自分のものは自分で調理し試食することが続いたため、切り方が均一でなかったり、いため方が不十分であったりするなど、より良く調理をしようとする意識が足りない様子が見られた。しかし、卒業を目前に控え、今までお世話になった友達に感謝の気持ちを表したいという児童が増えたこともあり、友達のために野菜いためを作るという機会を設定することにした。

本時では、その友達の好きな野菜や味付け等をインタビューする時間を設けるようにした。相手意識をしっかりとらせて取り組むことをねらったものである。野菜や調味料などの具体物をそれぞれの調理台に用意しておくことで、児童が英語と具体物を確認しながらインタビューを進めていくことができるようにした。材料については、色取りに配慮できるように様々な色の材料や皮むきをしないでいい葉物野菜を中心に用意した。そして、調理を終えて友達に野菜いためを贈るときに英語で挨拶を交わしたり、食べ終えた後に味の感想やお礼を伝え合ったりする時間も設定した。作ってくれた友達にお礼だけでなく味の感想も伝えさせることで、お互いに今後どういうところに気を付けて野菜いためを作ったらよいかに気づかせる目的がある。

このように、友達とコミュニケーションを取りながら調理を行うことで、家庭科としての目標はもちろん、英語を用いて学習することの目標についても達成できるように授業を構成した（表1）。

### 4) 授業の実際について

今までの英語の授業に家庭科の要素を取り入れた授業を仕組んだこともあり、今回の授業において、ほとんどの児童が英語を使いながら調理実習を行うことに抵抗はなく、スムーズに始めることができた。

まず、最初に調理実習を始めるにあたって必要な道具を具体物を見せながら示し、準備に取り組ませた。ボウル (bowl) や包丁 (kitchen knife)、フライパン (frying pan) などの英語は聞いたことのある児童が多く、具体物を見せなくても理解できていた。しかし、ざる (colander) や菜箸 (long chopsticks) の英語を聞いたことのある児童は少なく、英語で伝えるだけではどの道具なのかを想像できなかつたが具体物を見せることで、「そんな英語なの？日本語と違う。」と驚きながらも準備を進めることができた。外来語は英語がもとになっていると思っている児童も多く見受けられ、特にざるが“colander”と言うことに戸惑っている児童の姿があった。

準備後、7種類の野菜と卵 (vegetables & egg)、3種類の加工食品 (processed food)、3種類の味付けの調味料 (taste) を提示し、材料の確認を行った。野菜や卵についてはこの2年間で扱ってきたものばかりでなじみがあったが、加工食品や味付けの調味料については今回初めて扱うものもあり、とても喜んでいる様子が見られた。しかし、アレルギーや好みの観点で考えたとき、それらの材料をその友達が食べられるとは限らないため、どの野菜や加工食品が好きなのか、どの味付けが好みなのかについてインタビューを行うことにした。前もって準備してインタビューするわけではないこともあり、誰もが安心して取り組めるようにするために、2人組をつくってインタビューをさせることにした。また、表現が分からないときお互いに相談しながらできるようにすることもねらった。インタビューでは、“Do you like (野菜)?” “What vegetable do you like?” 等の表現は繰り返し学んできた表現であったため、どの児童も自信をもって尋ねることができた。また、答える立場の児童も “Yes, I do.” “No, I don’t.” “I like (野菜) and (野菜).” 等の表現を使って、自分が好きな野菜や加工食品、味付けについて伝えることができた。インタビューしたことをもとに、材料や味付けを選択し、なぜそれを選んだのか理由も含めてワークシートにまとめさせるようにした。理由については、日本語と英語のどちらでもまとめてよいことにしていたが、約8割の児童が英語で書いていた。“Because, they like egg and spinach.” “She like cabbage and bean sprouts.” (図4) から分かるように、複数形でなかったり三単現のsを忘れていたりして正確に書くことができていないが、英語の例文がワークシート内であったことで書きやすかったことと、英語で書き表したいという児童の意欲が高まっていたことが推察される。また、どのような工夫を行うのかも丸を付けて答えられるようにした(図5)。工夫の内容については、今までの調理実習で学んできた、色取りをどう工夫するのか、シャキシャキ感を出すようにするのか、旬の食材を使うのか等である。工夫について2人組でまとめさせたことで、色取りや切り方など、細かいところまで考えることができた。

材料の確認、選択後に、いよいよ友達のための野菜いため作りを開始した。調理の制限時間を20分間と設定したため児童が調理に懸命になるであろうと考え、児童同士で英語を使う場面はあえて設定せず、教師が見回りながら英語で “Clean up. (調理台の上を片付けましょう)” “Are you finished? (終わりましたか?)” “Can you cut? (切ることができますか?)” “How was it? (味はどうでしたか?)” 等と声をかけるようにした。2人組で調理を行うことで、役割分担をしながら段取りよく進め、どのグループも20分以内で終わらせることができた。

調理終了後、お互いに野菜いためを贈り合い試食をした。味の表現については既習表現ではあったが、もう一度確認した後、児童が試食している最中に感想を聞いて回るようにした。“It’s delicious. (おいしいです)” と答える児童が多い中、“It’s hot. (辛いです)” や “It’s no taste. (味がうすいです)” と正直な感想を伝える児童もいた。また、試食をしながら自分のためにどのような工夫をしてくれているのかを考えることで、野菜の硬さや色取り、適切な量等に気付くことができた。その気付きやお礼を英語で友達に伝える時間を設定し、それに加えて自分が食べた野菜や味付け、おいしかったかどうかとも伝えさせるようにした。ここでは、“I ate ~.” “It was ~.” 等の過去形の表現を使って伝えている(図6)。ただ、「食べた後だから過去形よね。」と教師主導で過去形の表現を確認し使わせているので、本来ならば児童が過去形に気付いて使うように仕向ける手立てが必要だったと感じている。

最後に授業の振り返りを行った(図7)。家庭科の基礎的・基本的な知識及び技能の習得・活用ができたと感じる児童の感想が見られる中、英語をどうにかして使おうとしたという感想もあった。家庭科の調理実習は、英語でコミュニケーションを行う上で、具体物が用意できることや動作化しやすいことが効果的であったと考えられる。

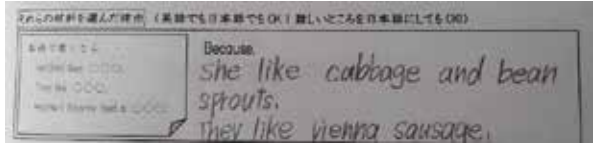
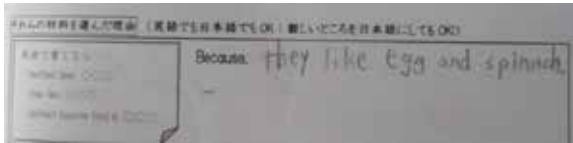


図4 児童が書いた理由

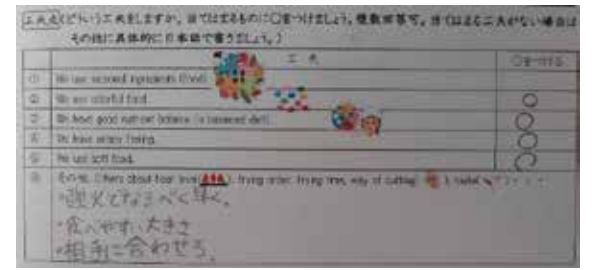
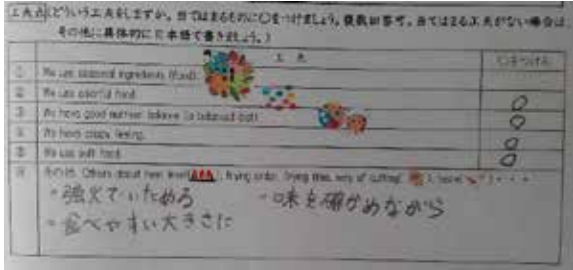


図5 野菜のためを作る上での工夫

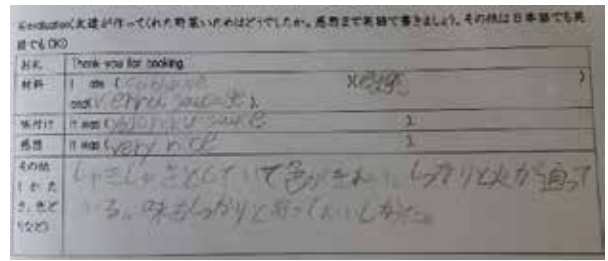
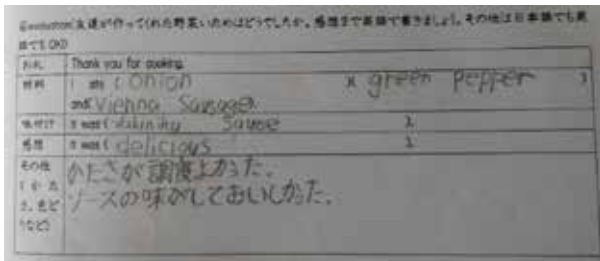


図6 試食後の気付き

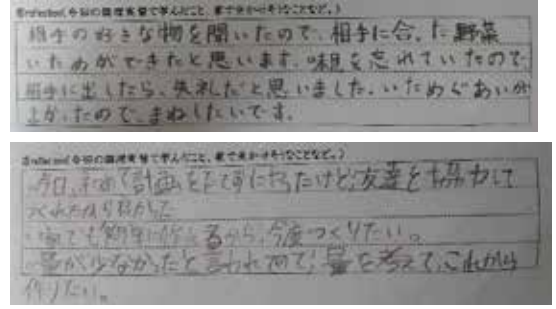
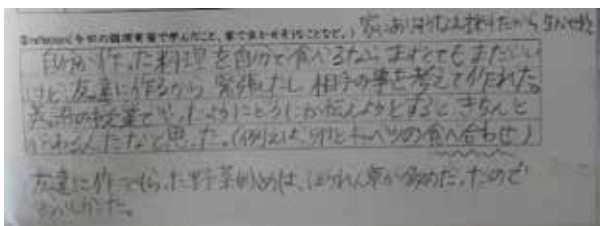


図7 授業の振り返り

表1 家庭科 CLIL の学習過程 (6年生の場合: 2時間分の授業)

学習過程	児童の活動	教師の働きかけと言葉等
1. 道具の準備	(1) 前時の振り返りをし、野菜いため作りで必要な道具の準備をする。	Let's review how to cook. 1 wash vegetables 2 cut vegetables 3 fry vegetables 4 seasoning 5 dish up Do you remember? Next! Today's kitchen utensils. (使う道具を英語で伝えたあと、具体物を見せて準備をさせる。) cutting board 2, kitchen knife 2, frying pan 2, bowl 2, colander 2, long chopsticks 2, kitchen cloth 1, dish cloth 2, dish 3~4, chopsticks 2 Is everything OK? I'll give you 10 minutes. Let's get ready now. Ready! Go! Time is up.
2. 学習課題の確認	(2) 前回は架空の人物のために野菜いためを作ったが、今回は友達のために野菜いためを作るという課題を確認する。	Today's goal Make pairs. Group 1, for group 9. Group 9, for group 1. Group 2, for group 10. Group 10, for group 2. (2人組を作り、別の2人組のために野菜いためを作らせるようにする。)
Fry vegetables for your friends with thanks.		
3. 材料と調味料の確認	(3) どのような材料や調味料があるのかを知る。	Today's food (ingredients) (英語で伝えたあとカードを黒板に掲示していく。) 【Vegetables and egg】 egg, spinach, carrot, green pepper, onion, bean sprouts, cabbage 【Processed food】 chikuwa, bacon, vienna sausage 【Taste】 curry spice, yakiniku sauce, worcester sauce (それぞれの部門を指さしながら、) Choose 2, Choose 1, Choose 1 For example, egg, spinach, bacon, curry spice cabbage, carrot, vienna sausage, yakiniku sauce. Are you OK?
4. インタビュー	(4) 友達(2人組)に英語でインタビューし、好きな材料や味付けについて知る。 ・ Do you like ○○? Yes, I do. / No, I don't. ・ What vegetable do you like? ・ What kind of taste do you like?	But, do you know your friend's favorite vegetables? ○○さん, Do you know his favorite vegetables? ○○さん, Do you know her favorite taste? (どうやって友達のことを考えた野菜いためにするのかを問う。) Let's interview to know your friend's favorite food. Watch the demonstration. Any volunteers? ○○さん, hello. What vegetable do you like? I like ○○. (ワークシートの拡大版に印をつけながら手本を見せる。) Or, do you like ○○? Do you understand? Thank you. Let's give them a big hand. I'll give you 5 minutes. Ready go! ~ interview time ~ Time is up. Go back to your seat.

5. 材料の 選択・調理	(5) インタビューをして知り得た情報をもとに材料と調味料を決めたり、工夫することを考えたりする。その後、その友達に決まったことについて英語で伝え、調理する。	Next ! Thinking time. 1 <sup>st</sup> choose2, choose1, choose1 (絵カードをさしながら) 2 <sup>nd</sup> Write about your choice and reason. (選んだ理由を書く時に、日本語でもいいけれど英語にチャレンジしてみるよう声をかける。) 3 <sup>rd</sup> please, check. (どのような工夫をするのか該当する項目に丸を付けさせる。該当するものがないときはその他に工夫の内容を書くように促す。) Next! Please talk to your friends about your choice. (手本を見せる。) Are you OK? Talk about your choice. Are you finished? From now, we have cooking time. I'll give you 20 minutes. Ready! Go! (できる限り、いろいろな指示を英語で出す。) Clean up. Wash the dishes. Good job. など。 (味見のときに英語で感想を聞いて回る。) How was it? Delicious? Time is up. Present for your friends.
6. 試食・ 片付け	(6) 友達が作った野菜いためを試食し、その後片付けをする。	Let's say together. “いただきます” (食べるときに、友達が自分達のために、色取りや匂、切り方など、どんな工夫がされているのかを考えながら食べるように促す。) I'll give you 20 minutes. (食べているときに英語で感想を聞いて回る。) How was it? Delicious? When you finish eating it, please clean up. Then, please write about evaluation. (No. 4)
7. お礼・ 感想	(7) 自分達が食べた野菜いために使われていたものや食べた感想を、作ってくれた友達に伝える。 ・ Thank you for cooking. I ate carrots, spinach and bacon. They were delicious. But, the carrots were hard.	Please, tell your friends what you think. (手本を見せる。) Let's start!
8. 本時の まとめ	(8) 調理実習の様子について振り返りをする。	Let's have reflection. (友達のために作った野菜いための出来栄えはどうだったか、友達の感想を聞いて学んだり友達が作ったものを食べて気付いたりしたこともあるのではないかと問いかけ、今回の出来栄えや、これから家庭で生かせそうなことについて書くように促す。) Japanese, OK. Let's give him a big hand. That's all for today.

## 5. アンケート調査結果

### 1) 選択式 (4件法)

ここでは、小学校6年生1クラス30名を対象とした選択式のアンケート結果の分析を行う。このアンケートは4件法(図8と図9は複数回答方式)にて実施されたが、「とても」と「まあまあ」を肯定的評価、「あまり」と「全く」を否定的評価としたい。また、質問内容については、主にCLILの4つの軸である「内容」「言語(聞く・話す・読む・書く)」「思考」「協学」や、英語面と家庭科面での両方の効果を聞くものとした。なお、各表中において、「とても」=4、「まあまあ」=3、「あまり」=2、「全く」=1とする。



まず、表2より、CLILの4つの軸の1つである「内容」への動機づけの指標では、100%が肯定的評価をし、否定的評価は見られなかった。全ての児童がこの授業を「楽しかった」と感じた理由としては、英語の授業で家庭科の要素を一部取り入れた授業は経験していたものの、家庭科の授業で英語を使うのは初めてで新鮮であり、知的好奇心を刺激されたことや、料理の食材や調理用具の具体物を通して英語を学ぶことで授業への興味・関心が高められたことなどが考えられる。

第2に「言語」の指標は、「聞く」「話す」だけでなく「読む」「書く」も含んだ全般的な言語能力と捉えることとする(二五, 2016, p.15)。「聞く」について分析すると、表2よりほぼ全ての児童が肯定的回答をしているものの、「先生の指示」と「友だちの話す英語」の聞き取りの間には多少の差があり、前者では10%の否定的回答もあった。これは、家庭科教員による英語での発問や指示が、'Make a pair.'や'Any volunteers?'のような単語数語の短い表現だけではなく、インタビューや片付けの説明の時のように、'Let's interview to know your friend's favorite food.'や'When you finish eating it, please clean up.'といった長文での英語による指示もいくつか行っている(表1)ことにも起因している。それでも多くの児童が聞き取れたと感じたのは、これが実技教科を英語で教えることの大きな利点の1つでもあるが、教員が好きな食材の候補をいくつか手にもって見せたり、片付けるべき「ざる」などの用具を洗うジェスチャーや動作で示しながら英語を話していたりしたことが児童にとっては理解の助けとなったと考えられる。その一方で、友だちが話す英語については、食材や調味料が単語として聞き取ればワークシートに○をつけることができる活動などにおいて、多くの児童は英語で聞き取りやすいと感じていたようである。次に、「話す」に関しては、否定的回答は10%だったものの、逆に、「とても話せた」と回答した児童も27%と比較的少なかったのが特徴的である。小学6年生の児童の多くは、英語の授業以外の場面でそれほど多くの英語使用の機会があるわけではないので、'Do you like ○○?' 'Yes, I do. / No, I don't.'や'What kind of taste do you like?'のような何度も練習した定型的な言い方であれば容易に口に出せるが、料理をしながらその状況を友達に説明したり、教員が回ってきて料理について英語で問いかけられたりした場合はなかなか話せないと感じているようである。しかしながら、これこそまさにCLILによって各教科と関わるオーセンティックな場面で英語を話すことに慣れる経験を積んでいけば、様々な状況での英語使用が徐々に可能となってくるのではないかと考えられる。

CLILの言語の指標の中で、本授業の「読む」や「書く」は、主にワークシート(参考資料)に関わる活動で、白板にはそのワークシートを拡大カラーコピーしたものが貼られていた。まず、「読む」についてみると、肯定的評価は単語レベルでは97%、文章レベルでは87%であった。文章レベルでの否定的評価の割合がやや高いのは、家庭科教員がその意味を説明しているものの、'I use seasonal ingredients (food).'や'I have good nutrient balance (a balanced diet).'を読むのは難しいと感じた児童もいたようである。その一方で、対象校は附属小学校ということもあり、4年生あたりの英語の授業から文字にも少しずつは慣れさせているようで、中には学校外ですでに英語を学んでいる児童もいることから、難なく読めたという児童も多かった。次に、「書く」についてみると、肯定的評価は単語レベルでは84%、文章レベルでは77%で、「読む」に比べると何れも否定的回答の割合は高かった。単語ではカラーのイラストを豊富に用いて、難しい単語も視覚の足場かけで理解しやすいようにし、ワークシートには4線も用いて書きやすいように工夫はされていた。文章では、材料を選んだ理由については、文例もあり、何とか英語で書けた児童も多くいたが、料理の工夫点や料理の評価・感想については英語で自由に書くのは難しく、多くの児童が日本語にて記入していた。CLILは、工夫や評価など特に高度な思考を要する場面では、どうしても英語ですべて行わないといけないという訳ではない。

表2 CLILの4Cの視点「内容」と「言語」

(N=30)

質問項目	④	③	②	①	Mean
<1>英語で家庭科の授業は楽しかったですか。	14	16	0	0	3.47
<2>先生の指示が英語で聞きとれましたか。	12	15	3	0	3.30
<3>友だちの話す英語が聞きとれましたか。	11	19	0	0	3.37
<4>あなたは英語を使えましたか(話せましたか)。	8	19	2	1	3.13
<5>英語の単語が読めましたか。	14	15	0	1	3.40
<6>英語の文章が読めましたか。	10	16	3	1	3.17
<7>英語の単語が書けましたか。	10	15	4	1	3.13
<8>英語の文章が書けましたか。	8	15	6	1	3.00

表3より、CLILの重要な軸の1つでもある「思考」の指標について考察する。工夫した「野菜いため作り」を考えることができたかとのアンケートの問いに対しては、児童全員が肯定的回答をした。これは、家庭科と英語の教員が協力してCLIL授業をデザインする過程で、できるだけ多くの活動場面に考える機会を提供したことに起因する(表1)。例えば、食材や調味料の選び方から、彩りやいため方、火の強さや料理の出来上がりの硬さや柔らかさにいたるまで、単に機械的に料理をするのではなく、友達視点にたって考えながら料理をしたことに起因する。考える場面が多かったことが思考力の発達につながるかどうかを証明することは難しいが、授業観察を行った限りにおいては、様々に工夫した複雑な料理を作ったグループが多くあり、ここからはある程度、児童の思考力の発達を促していることが読み取れる。

同様に、表3より、CLILのもう1つの重要な軸でもある「協学」の指標について考察する。グループで協力して活動することができたかとのアンケートの問いに対して、ほぼ全員が肯定的評価をした。この理由としては、教員側がCLILの授業として協同学習の場面を意識的に多く取り入れたことに加え、家庭科の調理の場面での協力は言うまでもなく、普段の日本語での家庭科の授業とは違って英語で分からないところを自然と教えあったり、工夫する各場面において英語でコミュニケーションをとらなくてはいけなかったりする必然性が生まれたことなどの要因が挙げられる。

表3 CLILの4Cの視点「思考」と「協学」および二刀流の視点

(N=30)

質問項目	④	③	②	①	Mean
<9>工夫した「野菜いため作り」を考えることができたか。	15	15	0	0	3.50
<10>グループで協力して活動することができましたか。	22	7	1	0	3.70
<11>今回の授業は英語の勉強になりましたか。	13	15	2	0	3.37
<12>今回の授業は家庭科の勉強になりましたか。	15	15	0	0	3.50
<15>また「英語で家庭科」をやってみたいと思いますか。	11	14	5	0	3.20

次に、英語面と家庭科面といういわゆる二刀流の効果について考察したい。表3からは、否定的な評価はわずかで、児童の大半は本授業が英語としても家庭科としても勉強になったと感じて

いることが分かった。複数回答方式の図8と図9から具体的に分析すると、英語の面で勉強になったこととしては、全児童の87%が「聞く」、80%が「話す」、67%が「読む」、53%が「書く」を挙げた。ここから言えることは、家庭科 CLIL の場合、先生の指示を聞きながら動作をしたり、友達同士でコミュニケーションをとりながら料理を工夫したりする活動が多いため、「聞く」「話す」に一番の学習効果があり、その次にワークシートを利用する活動を通じた「読む」「書く」に効果があると思われた。また家庭科の専門用語も含む「単語」についてもオーセンティックな場面での4技能の活動を通じて、自然に定着を図っていけるのがCLILに特徴的である。「文章」や「発音」については、半数以下と勉強になったと回答した児童が比較的少なかった。その一方で、家庭科の面で勉強になったこととしては、全児童の73%が「調理の工夫」、70%が「野菜のための作り方」、67%が「協力して作ること」、60%が「材料や調味料の知識」を挙げ、「作ってくれた料理を評価する」が勉強になったとした者は少なかった。家庭科の技能面の向上と関わる「野菜のための作り方」、思考の発達と関わる「調理の工夫」、そして学び合いの深化とも関わる「協力すること」を大多数の児童が言及しており、家庭科の面での学習効果があったと考えている。以上のことから、英語科だけでなく家庭科の目標もある程度達成されており、まさに二刀流の学習効果があったといえよう。

最後に、表3のまた「英語で家庭科」をやってみたいと思うかの問いに対しては、83%が肯定的評価をし、小学校高学年の児童は、家庭科のような他教科を通じて英語学習をしたいという強い意欲のあることが示された。

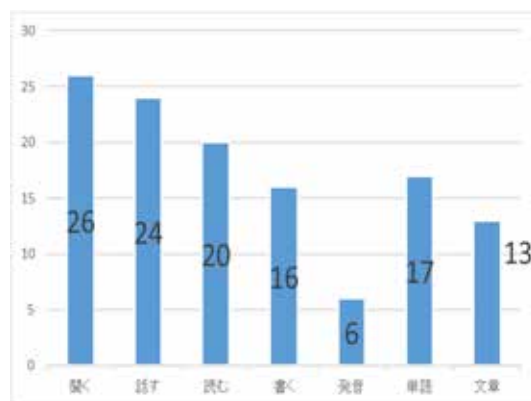


図8 英語の面で勉強になったことはどんなことですか。いくつでも○をつけて下さい。

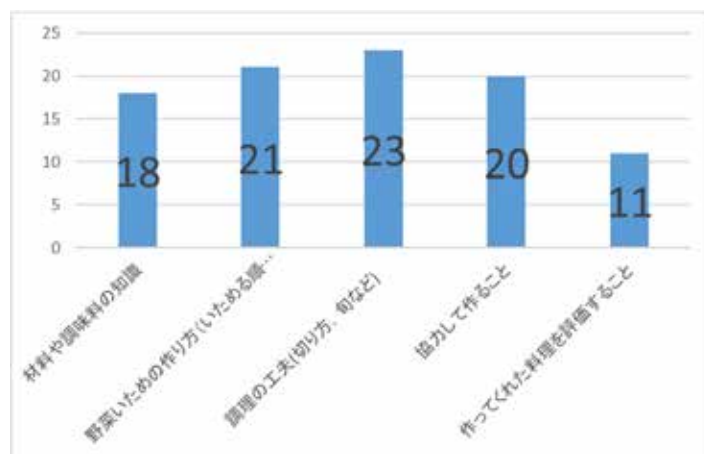


図9 家庭科の面で勉強になったことはどんなことですか。いくつでも○をつけて下さい。

## 2) 自由記述式

上述の選択式のアンケート調査結果を補完する目的で、ここでは自由記述式によって、具体的かつ詳細な児童の声を紹介したい。選択式と同じ分析指標にするため、児童の記述文は CLIL の 4C である「内容」「言語」「思考」「協学」に関わるものを主に取り上げ、例えば「思考」と「協学」の2つの項目に関わるような記述文もあったが、できるだけ主要な指標を基に4つのカテゴリーに分類した。その上で、各記述文の指標には筆者の方でハイライトのため下線を引いた。自由記述式の調査では、大多数の記述文が肯定的意見で否定的なものはごく少数ではあったが、参考のために否定的意見についてはすべて紹介することとする。

### (1)「内容」への興味

- 今まで英語なら英語だけでしていたけど、2つの教科を合わせてできたから楽しかった。
- 英語と家庭科（野菜のだんごとか）の勉強になった。
- 2つの授業を一緒にやって楽しかった。
- ものの言い方が色々あって楽しかった。
- 同時に2つの勉強ができるので効率が良いと思います。
- 家庭科だと専門用語が算数みたいに少なく、フライパンやポテトなど幼稚園で習う単語が多かったので楽しかった。
- 分からない単語もあったけど、楽しくおいしく作れたので良かった。
- 英語の勉強にもなったし、料理の勉強にもなって良かった。

### (2)「言語」の面

- 英語での調味料や道具の言い方が分かって勉強になった。日常生活会話で使えそう。
- いろいろな調味料の名前を知ることができた。
- 分かりにくいけど、英語だとジェスチャーや絵で分かった。
- フライパンにベーコンを入れる時とか英語を使うことが少しできた。
- 英語で指示されたんですけど、だいたい理解できた。
- 家庭科の授業で使う英語は、ふだん聞きなれないものもあったので勉強になった。
- どうか伝えようとする、きちんと伝わるんだと思った（例えば、卵とキャベツの食べ合わせ）。
- 英語だけでやる （英語の授業）より話しやすかった。

### (3)「思考」の面

- いつもは調理のことだけを考えてするんだけど、今回は考えながらできて良かった。
- 自分でメニューを考えて、おいしく作ることができた。
- そっきょうで、限られた食材の中でどうすればいいのか考えた。
- 調味料や食材の量を考えて、2人分の料理をすることができた。
- その場で料理を考えて作ることができたと思う。
- 量がすくなかったと言われたので、量を考えて、これから作りたい。

### (4)「協学」の面

- 文章で何かを書くところが難しかったけど、班で協力して理解できた。
- 材料の単語を見て分からない所もあったけど、ペアの人が教えてくれたりしたから良かった。

- 今日、初めて計画を立てずにやったけど、友達と協力して作れたから良かった。

#### (5) 否定的意見

- 英語は英語、家庭科は家庭科にしてほしいかも。
- いざとなってあたふたしたら、日本語が出てきた。
- 実物を見ないと分からない単語があった。
- 英語と家庭科を同時にするのは難しかった。
- 全て英語でやるのは少し難しかった。
- 英語で意志を伝えるのは難しかったが、伝わった時はうれしかった。
- 材料は英語で言えるけど、使う道具の英語が初めて聞くのもあって難しかったです。

## 6. おわりに

研究結果、選択式（4件法）においては、内容への動機づけと思考の面で児童の100%、協学の面では98%が肯定的な反応を示した。言語面での習得では、「聞く」（先生の指示）と「話す」は90%、英語の文章を「読む」は87%の児童が肯定的反応だったが、英語の文章を「書く」では23%が否定的反応を示し、ワークシートへの書き込みは日本語で行った児童も多くいた。しかしながら、ここからは、CLILの指標である「内容」と「言語」の両面に加え、「思考」や「協学」の面でも一定の効果が見られる。

また、自由記述式からは、「英語の勉強にも料理の勉強にもなって良かった」「同時に2つの勉強ができるので効率が良い」など二刀流のプラス面を指摘する声が多い一方で、「調理道具の英語は難しい」や「文章で何かを書くのは難しい」などの指摘もあり、今後の家庭科CLILでは、専門用語や文例の提示の際の足場かけをさらに工夫する必要がある。

本実践報告の提言としては、すべて家庭科を英語で行うといったことではなく、無理ない程度で英語を導入するのであれば、英語の授業だけでは不可能なオーセンティックな場面での英語使用の幅を広げることが可能となり、家庭科の授業において英語使用をすることは十分に意義があると考えられる。とりわけ、CLILへの批判として他教科を英語で教えると内容理解のレベルが下がるのではないかという主張があるが、本実践の結果からは、家庭科CLILの場合、動作をしながら視覚的情報も活用でき理解の助けにもなる利点があるので、むしろ英語教育とはなじみやすいことが示唆されている。それはまさに、家庭科と英語の両方に対する一石二鳥の相乗効果である。また、家庭科CLILの本実践は、「言語」と「内容」の統合のみにはとどまらず、英語科と家庭科の共通目標でもある「思考」や「協学」を重視した質の高い学び、言い換えれば英語の授業という狭い枠組みを超えた新しい英語教育の発展の可能性を提言するであろうと信じる。

## 引用文献

- アレン玉井光江・阿野幸一ほか. (2021). 『New Horizon Elementary English Course 6』東京書籍.
- 和泉伸一・池田真・渡部良典. (2012). 『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用』東京：上智大学出版局.
- 岩城節臣. (2020). 「CLILを導入した表現運動の実践」『体育科教育』、2020年3月号、48-51.
- 太田圭・長瀬慶来. (2018). 「Partial CLILと小学校外国語活動－小学校5年生の家庭科実践の分析から－」『教育実践学研究』、23号、283-294.
- 柏木賀津子・伊藤由紀子. (2020). 『小・中学校で取り組む はじめてのCLIL授業づくり』東京：大修館書店.
- 小嶋英夫. (2016). 「大学英語授業における主体的・協働的な学びに関する一考察」『文教大学教育学部紀要』、第50集、189-200.
- 笹島茂. (2011). 『CLIL 新しい発想の授業－理科や歴史を外国語で教える！？』東京：三修社.

- 笹島茂・山野有紀. (2019). 『学びをつなぐ小学校外国語教育の CLIL 実践』 東京：三修社.
- 笹島茂. (2020). 『教育としての CLIL』 東京：三修社.
- 二五義博. (2013). 「算数の計算を活用した教科横断型の英語指導—小学校高学年児童を対象とした英語の数の学習を事例として—」 *JES Journal*, 13, 84-99.
- 二五義博. (2014). 「CLIL を応用した二刀流英語指導法の可能性—小学校高学年児童に社会科内容を取り入れた指導を通して—」 *JES Journal*, 14, 66-81.
- 二五義博. (2016). 『8つの知能を生かした教科横断的な英語指導法—MI（多重知能）と CLIL（内容言語統合型学習）の視点より—』 広島：溪水社.
- 藤井康子・東奈美子. (2017). 「小学校図画工作科と外国語活動による協働学習の実践的研究Ⅱ：英語を使って鑑賞及び表現活動を行う授業の一考察」『大分大学高等教育開発センター紀要』、9号、85-100.
- 文部科学省. (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)
- 文部科学省. (2017a). 「小学校学習指導要領（平成 29 年公示）外国語活動」  
[https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf)
- 文部科学省. (2017b). 「小学校学習指導要領（平成 29 年公示）解説 家庭編」 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_009.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_009.pdf)
- 吉田研作ほか. (2020). 『Junior Total English 2』 学校図書.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一. (2011). 『CLIL（クリル）内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』 東京：上智大学出版局.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamano, Y. (2013). Exploring the use of content and language integrated learning (CLIL) in foreign language activities. *JES Journal*, 13. 20-35.

# いためて作ろう！朝食のおかず ～感謝の気持ちをこめて～

name \_\_\_\_\_

Today's goal














今までの感謝の気持ちをこめて、友達のために野菜いためを作ろう。

～英語のめあて～ Fry vegetables for your friends with thanks.

① friends' name

Aさん( ) Bさん( )

② interview (好きと言われた食べ物に○をつけましょう。)

《 Vegetables & egg 》	A	B	《 Processed food 》	A	B
egg 			chikuwa 		
spinach 			bacon 		
carrot 			vienna sausage 		
green pepper 			《 Taste 》		
cabbage 			curry spice 		
bean sprouts 			worcester sauce 		
onion 			yakiniku sauce 		

③ choice

We choose 野菜 か 卵 , 野菜 か 卵

and 加工食品 .

We season with 味付け .

